

たわけだから、そのどの次元の地平から見ても、私の手に余ることは見え見えだからである。

ところが、私が挙手したのは、それらのどの次元からでもなく、そもそも、この本が編まれた経緯から言って、その編者その人が、解説を書いておられることを既に知っていたからであった。じゃあ、逆に、そんな、なあなあの関係で書く書評など、余計に駄目ではないか、と言われそうだが、どっこいそれが全く違うのである。まず、編者という字句は本書のどこにもなく、表題となった「人と人との間」は、既に、ずっと以前に著者自身によって刊行されたものであり、本書が「新編」というタイトルを掲げているのは、「第6章」のあと「人と人とのあいだの病理」という文章が入っているからであり、これは、著者生前の1986年10月の河合塾大阪校における講演の電子化なのである。まさに、著者自身の語り口がそのまま進み出るような講演原稿を加えて刊行したものであり、解説を担当している清水健信氏は、東京大学の文科を出て、京都大学の医科を卒業している、まさに俊秀なのだ。彼は、著者在世中に、京都にあって、その学問を直接受け継ごうと師事された人でもある。さてここからが、本書の書評であるが、彼の解説は、これまで、我が国の誰一人なし得なかった、木村敏氏の、すべてのドイツ語論文ばかりか、フランス語論文などにも目を通しての解説なのであり、実に、コンパクトかつ、実に精緻・的確に、解説されていて、舌を巻いた。私自身はともかく、村上仁・大橋博司・河合隼雄・中井久夫といった大天才たちに直接接した私から見て、本書は、これ以後、精神病理学の世界に手を染めようと思っている若い人たちには是非読んでほしいからに過ぎない。若干、私の目から見ての木村敏氏の論立てへの疑問は、氏の真骨頂である統合失調症〔むしろ、氏の執筆時代では精神分裂病〕の中の、氏の最も得意とするBlankenburg流の「寡症状性分裂病」には一切触れず、しかも、中井の「破瓜型」にも一切触れずに、「妄想型」と「緊張型」だけに絞っている点や、西田幾多郎とHusserlやHeideggerからの立論ゆえに、分からぬではないが、彼の「あいだ(Zwischenmenschlichkeit)」理論の原点が存在論的ontologischや存在的ontischでなければならぬ、本当の理由をきちんと付してほしかったのである。

新編 人と人との間

精神病理学的日本論

木村 敏著

筑摩書房、文庫判320頁、1,430円、2025年3月刊

(京都ヘルメス研究所・京都大学名誉教授) 山中康裕

私は本書が、編集会議において話題に上がった時、真っ先に挙手した一人である。普通から言ったらそれ自体ありえないことである。何故なら、木村敏といえは、日本のというより、むしろ世界に冠たる、ドイツ語・フランス語・イタリア語・英語圏でもすぐれた論文を発表している、真に世界的な精神病理学者であって、私の如き一精神療法家が、その重すぎる任に到底耐えるものとはとても思えないし、しかも、当の著者自身は、既にこの世の人でなく、かつ、リアルでは私の名古屋時代の直接の上司であっ